

水戸城大手門跡の調査

～“瓦塙”を考える～

関口 慶久

【水戸城跡（第1地点・大手門跡）調査概要】

所在地 水戸市三の丸2丁目地内

調査原因 大手門復元整備事業に伴う範囲確認調査及び工事立会調査

調査期間・面積 第1次調査：平成5年8月20日～9月2日

第30次調査：平成24年6月5日～6月8日

第32次調査：平成24年8月20日～9月4日

第40次調査：平成27年8月3日～12月15日

第42次調査：平成28年3月15日～5月31日

第63次調査：平成29年11月24日～平成30年4月24日

第74次調査：平成30年7月23日～7月27日

調査主体 水戸市教育委員会（担当：川口武彦・関口慶久・廣松滉一）

調査支援 株式会社関東文化財振興会（担当：宮田和男）※第40次調査のみ

はじめに

水戸城跡は、水戸市の遺跡の中でもとりわけ多くの調査量を蓄積している遺跡の一つであり、調査数は80次を超えており。特に平成29～30年にかけて実施した第63次調査では、日本最大級と見られる瓦塙が発見され、大きく報道された。

一方、発見された瓦塙については不明な点が多い。この巨大な瓦塙は、いつ、誰が、何のために造ったのか。本発表では、水戸城大手門跡の発掘調査の主な成果を報告するとともに、瓦塙の来歴について考察を加え、その謎に迫っていくこととした。

1 水戸城の概要

水戸城はJR水戸駅の北から約200mの台地（上市台地）上に位置する（第1図）。築城年代は定かではないが、平安時代末から鎌倉時代はじめの頃、常陸平氏の流れを汲む、馬場大掾氏により館が築かれたのが最初とされる。その後、江戸氏・佐竹氏・徳川氏と城主が変わる中で、次第に城郭のエリア（曲輪〔くるわ〕と呼ぶ）が拡張され、最終的には4つの曲輪が構築された。西から下の丸曲輪、本丸曲輪（現水戸第一高等学校）、二の丸曲輪（現水戸第二中学校、水戸第三高等学校、茨城大学付属小学校）、



第1図 水戸城跡の位置

三の丸曲輪（現弘道館、三の丸小学校、県庁三の丸庁舎他）という（図2図）。

さらに水戸城は、城下町を取り囲む堀と土塁を三重に巡らしていた。こうした町全域と城域とし、堀や土塁を廻らす構造を惣構（そうがまえ）と呼ぶ。広義の水戸城である。惣構の北は那珂川、南は千波湖が外敵を阻み、その規模は東西約3.5km、南北最大約1.2kmに及ぶ（第3図）。土造りの平山城としては国内最大級の規模であった。

2 大手門の概要

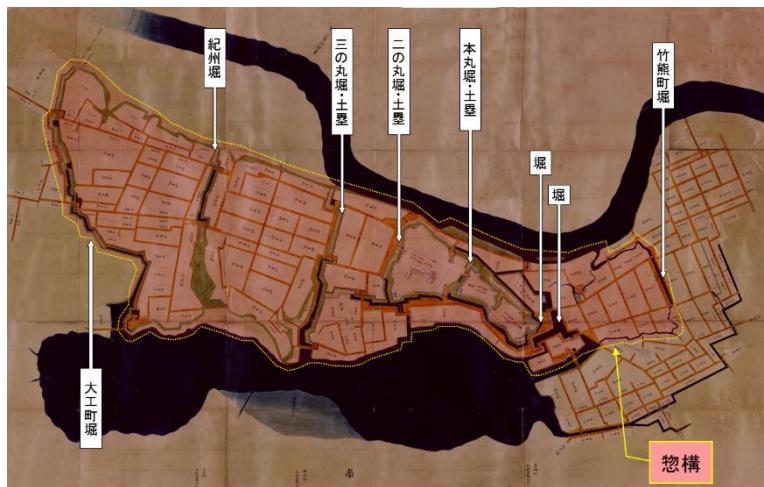
大手門は、水戸城の正門である（写真1・第4図）。構造上の名称は二重櫓門という（2階に櫓が付く門という意味）。城内の二重櫓門は、大手門と淨光寺門（搦手 [からめて] 門）の二つがあり、最も格式が高かった。

大手門がいつ建てられたかは不明な点が多いが、佐竹義宣（よしのぶ）が水戸城主だった時代、すなわち文禄2（1593）年～慶長7（1602）年の間に普請されたと考えられ、その後徳川家に引き継がれた。

平面規模は桁行9間であることが古写真から判明している。1間が何mなのかは、時代や地域によってまちまちであるが、発掘調査や古写真の分析の結果、水戸城大手門の桁行



第2図 水戸城の曲輪



第3図 水戸城物構

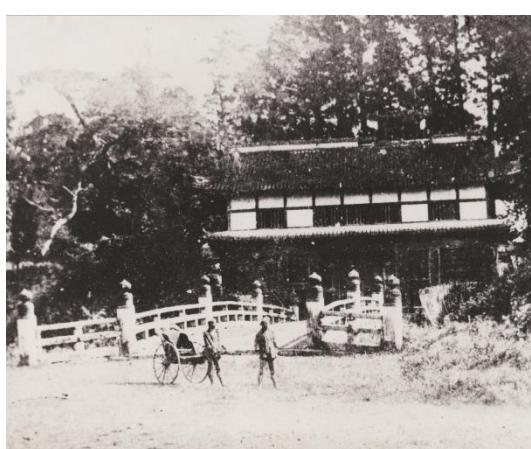
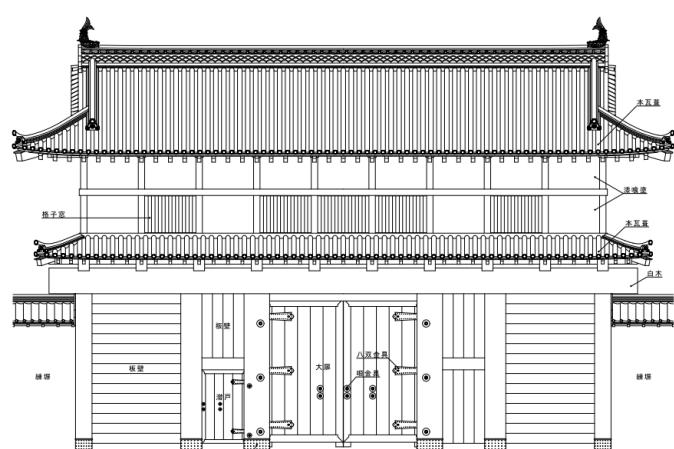


写真1 水戸城大手門 吉写真



第4図 水戸城大手門 立面図

(長軸) は 17.182m, 梁間(短軸) は 5.727m, 高さは 13.343m を測ることが判明した。土壘に取り付く大手門としてはまことに大規模であり、御三家徳川家の居城の表玄関にふさわしい偉容を備えていたと言えるだろう。

3 調査の目的

現在、水戸市では弘道館・水戸城跡周辺地区の歴史まちづくりの一環として、水戸城大手門・二の丸角櫓・土壘の復元等整備を進めている。

城郭建造物の再現には、一般的に次の4種類がある。

- ・復元建造物…発掘調査や文献調査等、慎重な時代考証を重ね、当時と同じ位置・内外観・設計・工法・部材に限りなく近い形で再現するもの。白河小峰城、土浦城など。
- ・外観復元建造物…時代考証を重ね、当時と同じ位置・外観に限りなく近い形で再現するが、内部や工法は当時のままでないもの。会津若松城、名古屋城など。
- ・復興建造物…当時建っていた場所に建てるもものの、内外観や工法等は当時のままでないもの。小田原城、大阪城、逆井城など。
- ・模擬建造物…当時建っていない、城郭風建造物を建てるもの。豊田城、熱海城など。

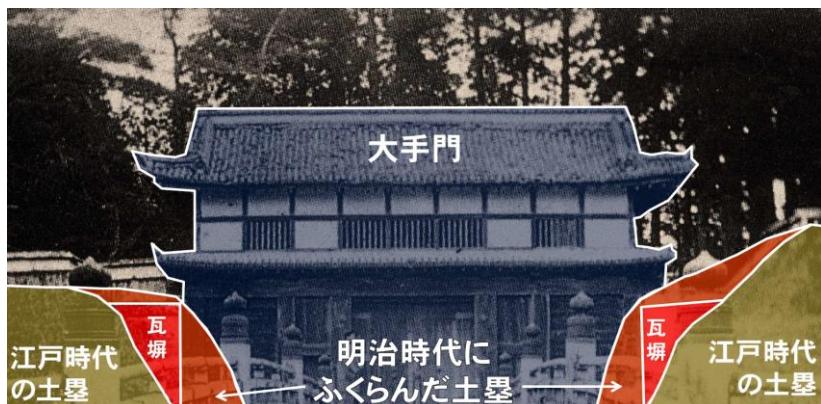
水戸市で進めている城郭整備は、大手門・二の丸角櫓が復元建造物、土壘は外観復元建造物による再現を目指している。いずれも時代考証が必要な再現法であり、古写真や古絵図の考証に加え、発掘調査による位置や寸法、出土瓦などの当時の建築部材の考証は復元には欠かせないものとなる。

そのため、水戸市では復元整備に必要なデータを得るために、平成5年から7次にわたる整備目的の発掘調査を実施し、慎重に検証を進めた。

4 主な調査成果

(1) 土壘跡

大手門の両袖(南北)には土壘が現存し、県史跡に指定されている。一方、整備前の段階では、土壘に大手門が取り付くような痕跡は全く視認できない状況にあった。そのため、土壘と大手門との取り付き部の確認のため、トレーナー調査を実施したところ、土壘裾部の構築土には天保期頃の瓦が大量に包含されていることが判明した。すなわち、土壘裾部は近世の構築ではなく、大手門解体に伴って発生した瓦等の部材を処分するため、近代以後に土壘を膨らませたことが判明したのである(第5図)。以下に報告する礎石跡、瓦壠跡、石組水路跡等は、全てこの膨らんだ土壘、すなわち近代土壘にパックされ保全されていた。



第5図 大手門の土壘構造(概念図)



写真2 細石跡

(2) 磐石跡

磐石の破片とみられる切石や栗石の痕跡が複数検出された（写真2）。一方で大手門の磐石そのものは発見されなかった。大手門は明治後期に解体されたと考えられており、解体に伴い磐石も撤去又は転用されたものと思われる。

(3) 瓦塀（練塀）跡

大手門の四隅から、瓦と粘土を交互に積み上げた「瓦塀（練塀）」と呼ばれる大型の塀跡が全4基検出された（写真3～7）。瓦塀の規模は次のとおりである。

- ・北西側瓦塀（19号遺構）：高さ2.7m（残存値）×厚2.4m（完存値）×横幅1.9m（残存値）
- ・北東側瓦塀（20号遺構）：高さ1.5m（残存値）×厚0.8m（残存値）×横幅2.1m（残存値）
- ・南西側瓦塀（21号遺構）：高さ2.1m（残存値）×厚2.7m（完存値）×横幅1.4m（残存値）
- ・南東側瓦塀（22号遺構）：高さ2.2m（残存値）×厚2.1m（完存値）×横幅2.4m（残存値）

残念ながら各瓦塀は近代以後に崩されており、完存しているものはない。しかしながら、4基のうち3基については、厚さが完存しており、2.7m～2.1mと肉厚である。城門に取り付く塀でこうした規模のものは類例がなく、本遺構は城内における塀のありようを窺ううえで注視すべき事例と考えられる。そのため、本遺構については次章において、今少し考察を加えることとしたい。

(4) 石組水路・石組枡（ます）跡

土壙裾部からは、石組水路・枡がほぼ完全な状態で発見された（写真8）。水路は底石+左右側石（がわいし）+蓋石（ふたいし）の4パートを基本とする暗渠構造であり、枡石は左右の側石を3段構造にしたもので、蓋石は確認されなかった。恐らくは常時開口しており、大手門や土壙から流れる水を集める集水枡の役割を果たしていたのであろう。石材



写真3 北西側瓦塀



写真4 北東側瓦塀



写真5 南西側瓦塀



写真6 南東側瓦塀



写真7 瓦塀の位置



写真8 石組水路・枡跡

はすべて凝灰質泥岩であり、水戸城がある上市台地斜面から採掘が可能である。

水戸城及び城下では、2代藩主光圀が敷設した笠原水道や、水戸城内の水路に凝灰質泥岩を用いたと暗渠水路を積極的に採用している。本遺構もそうした傾向の中で設置されたものと考えられる。

4 “瓦塀”を考える

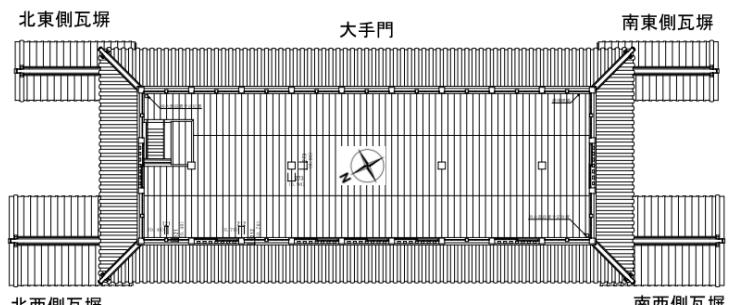
以上の成果を踏まえ、本章では改めて瓦塀に注目し、考察を加えたい。

(1) 規模・構造

瓦塀の現況の規模は前章で述べた通り、厚みは判明したものの高さと幅の本来の値は不明である。しかし古写真には西北側瓦塀の写真が移っており、大手門との対比から概ねの高さを比定することは可能である。そして分析の結果、高さは5.0mになることが判明した。すなわち、高さ5.0m×厚さ2.7~2.1mという巨大な袖塀が大手門の四隅に取り付くという景観が復元できるのである（第6・7図）。



第6図 水戸藩追鳥狩画冊



第7図 大手門・瓦塀の平面図

(2) 類例

城門の両脇が石垣の場合、石垣間に櫓を渡す「渡櫓門」が一般的だが、水戸城大手門のように両脇が土塁の場合は、下層の柱で支え、自立させなければならない。

そして城門と土塁の間には隙間が生じるため、その隙間を埋める袖塀を付すこととなる。こうした類例としては、弘前城追手門（写真10）・土浦城櫓門（写真11）があるが、いずれも簡易な土塀を左右1つずつ取り付けて隙間を埋めており、水戸城大手門のように四隅に巨大な土塀を取り付けるといった事例は見当たらない。城壁に瓦塀を採用する例としては、小田原城御用米曲輪内の土塀跡がある（写真12）。上部は欠損しているため全貌は不明であるが、厚みは110cmを測る。土塀の規模としては一般的なものであり、水戸城大手門瓦塀の規模とは大きく様相が異なる。

すなわち水戸城大手門の瓦塀は、構造といい規模といい、類例を見出すことはできず、恐らく全国の城門の中でも唯一の特異な構造物であったと考えられるのである。



写真10 弘前城追手門



写真11 土浦城櫓門



写真12 小田原城瓦積遺構

(3) 瓦の意匠等と年代観

瓦塀がいつ造られたのかは明確ではないが、構築材である瓦の観察から、概ねの年代を推定することは可能である。

瓦塀の構築材として仕様されている瓦は、大半が平瓦の破片である。外面は平瓦や熨斗（のし）瓦を列状に並べ、列と列の間を漆喰で埋めて化粧を施している。大手門正面に当たる北西瓦塀では、平瓦や熨斗瓦に加え、菊丸瓦や輪違（わちがい）瓦等も埋め込み、装飾的な意匠を施している状況が窺えた（写真12）。また、北西瓦塀や南東瓦塀では基礎に丸瓦を敷いているが、強度がないため上部に孕みが生じている。さらに北西部・南西部の二つの瓦塀には、後代に新たに化粧瓦を貼り付け補修している状況が窺えた。補修前の瓦塀には棟瓦は一切使用されていないが、補修部分には棟（さん）瓦が用いられている。

水戸城下において棟瓦がいつ導入されるかは明かではないが、出土棟瓦はいずれも弘道館の瓦と相似していることから、補修時期は19世紀後半以降と考えられる。補修前の瓦塀については年代の比定が難しいが、近世前期の瓦に比べ定型化されている一方、燻（いぶ）しが甘い等の特徴が認められることから、18世紀後半以降と考えられる。

(4) 性格

瓦塀の構築には、膨大な量の瓦を必要とするが、瓦塀の構築時期と推定した18世紀後半は、奇しくも水戸城内において大量の瓦を必要とする事件が起きている。それは明和元（1764）年の水戸城大火である。この明和の大火では、天守をはじめ多くの建物が焼失した。天守をはじめとする城内建造物の復興がいつなされたかは不詳だが、速やかな修繕が行われたと考えるのが自然である。大手門瓦塀は、この復興に合わせて、大手門を莊厳するために普請されたのではないだろうか。

実は水戸藩では18世紀前半から城内土塀のあつらえを瓦塀にすることを推奨している（「享保日記」）。こうした城内における積極的な瓦塀の採用の集大成とも言うべき構造物として、そして明和の大火の復興の表徴として、水戸城瓦塀は造られたと考えるのである。

おわりに

冒頭に述べたように、水戸城の発掘調査は日を追う度に蓄積している。今回は大手門、そして瓦塀に注目したが、今後も水戸城の総合的把握に向け、発掘調査はもとより、文献史・建築史学の所見を咀嚼し、水戸城の実像に迫っていきたい。

最後に、玉川里子・藤井達也（水戸市立博物館）・春日井道彦（文化財建造物保存技術協会）の各氏には多方面で多大なる教示を得た。記して感謝の意を表したい。

【引用・参考文献】

- ・ 小田原市教育委員会編 2016『史跡小田原城跡御用米曲輪発掘調査概要報告書』
- ・ 春日井道彦 2018「茨城県 県指定史跡水戸城跡大手門復元整備工事」『文建協通信』No.131 文化財建造物保存技術協会
- ・ 宮田和男・関口慶久 2017「水戸城大手門・大手道の調査」『第39回茨城県考古学協会研究発表会』
- ・ 水戸市立博物館編 2019『特別展図録 水戸城遙かなり』（印刷中）



写真12 瓦塀の意匠